
きらきら

愛乃 瑠夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きらきら

【Nコード】

N1567H

【作者名】

愛乃 瑠夏

【あらすじ】

主人公・・・斎藤勇樹人魚・・・水泡理紗すいほうりしや この勇樹視点で物語は展開していきます。至極平凡な健康優良児、勇樹が初めて恋した幼馴染み(?)の女の子、理紗は実は人魚だった！人魚としての運命を背負った理紗は、勇樹との恋は出来ないと確信していたが・・・。

プロローグ（前書き）

この作品は、あらすじは一応たっていますが、どうなるか作者の私
も分かりません（；――）

それに対しての苦情、中傷などはお控えください。

楽しんで読んで戴ければ幸いです。（*^―^*）

それでは、どうぞ（ ^o^ ）

プロローグ

大好きだよ、君のそういう所。

恥ずかしい筈なのに頑張つて、敢えて僕に笑いかける。

僕はその度に可愛いなって思ってしまうから、もうどうしようもないくらい、君を好きになってしまったんだ。

不安なのは僕も一緒だから、ね？

きらきらしてるあの星よりも、どんなに輝く宝石よりも、君が一番輝くよ。

こんなのちよっとクサイかな？

だから僕とずっと、一緒に居て下さい。

大好きだよ。

プロローグ（後書き）

此処まで読んで戴いて有難うございます（^^）

本当に嬉しいです（^o^）

どうかこれからもご贖員に・・・（^^）

読者の皆様に感謝感謝です！

第一話 好きです。(前書き)

どうも〜 (*^_^*)

きらきら を手にとって(?) 戴き有難うございます (^o^)

この第一話からお話が始まります。

では、さようば〜

第一話 好きです。

「最後の晚餐」。

世界中が認める、レオナルド・ダ・ヴィンチの名画だ。

それにしても、こんなものを見て理紗は何が楽しいのだろう？僕が見ても、唯の絵にしか見えないし、大体この作者がどういふ風にな名になったのかという事の方が気になる。

・・・いや、実際に実物を見ているのではない。テレビに映し出された物を、理紗はここぞとばかりにめり込むようにして見ているのだ。

「おい理紗あ、お前いい加減にしろよ。映画始まるぞ。」

僕がしきりに急かすのに、理紗はテレビの前を離れようとしない。

「大丈夫だつて。あと1時間もあるじゃん。」

僕は、深いため息をついた。幼馴染みの水泡すいほう、理紗と、今日は映画を見に行く予定なのだ。おっと、僕の名前の紹介を忘れていた。僕の名前は斎藤さいとう 勇樹ゆうき。物凄く平凡だと思う。あ、”僕”と”俺”は、話し相手によって使い分けてるから、その辺は察してほしい。

・・・ここで一つ、はっきりさせよう。僕は、理紗が好きだ。

何だつて？展開が分かりやす過ぎる？・・・いいじゃないか、それくらい！

でも僕は、本当に本気で理紗に恋してるんだ。

この想いに気づいたのは去年・・・中1の春だ。遅いつて？すみませんねえ、これが初恋なんです！

理紗は、クラスでも本当に一人浮いてるくらい可愛い。瞳はラクダのように長いし、肌は透き通るように白い。髪はつややかな茶色があったミディアムロング。笑うと天使みたいでくらからする。美人に疎い僕がここまで言うのだから、本当に本当に可愛い子なんだ。

第一話 好きです。(後書き)

此処まで読んで戴き、有難うございました(^^)

どうか、次話も宜しくお願い致します(*^|^*)

第2話 表情

理紗が、やっとテレビから離れた。映画館までは、5分もあればいける距離だ。

「ねえー、勇樹は何であの絵に感動しないの？」

理紗が、もの凄く不思議そうに言ってきた。何でって・・・

「実物じゃないからじゃねえの？」

僕が言くと、理紗はふーん、あつそ。と言った。ヤバい、僕に対しての興味が無くなってる！

「そう思うと、理紗は感性が豊かだよな。俺はそんな風に思わねえし。」

僕は必至にフォローした。理紗は本当に可愛いけど気まぐれなところもある。ここで映画行かないなんて言われたら、頑張つて誘ったのが水の泡になってしまう。

「本当？嬉しいなあ。最近勇樹にそんな事言われてなかったから余計に。」

理紗はそう言つて、にっこりと笑った。嗚呼、この笑顔をもっともつと見ていたい。理紗、俺もう本気でお前が好きだよ・・・。

「ほら理紗、ついた。」

「知ってるよ！あたしがどれだけこの街に居ると思つてんの？」

そういうやりとりをしながら、僕たちは映画館に入った。すると、後ろから声が聞こえた。

「おーい、勇樹い！と・・・水泡さん！？」

クラスの友達だ。やべー、理紗と一緒に居るとまた厄介なことに・・・。

案の定、僕は理紗から離れて、友達のところ連れて来られてしまった。

「おい勇樹、なんで水泡さんと一緒に居るんだよ！ずりーぞお前だけ！」

そんなことを言われている間、理紗は一人で退屈そうにしていた。もういい加減、放してくれ。

「わかったわかった！後で説明するからもう行かせてくれよ。映画始まるんだよ。」

それを聞いた友達は大袈裟に驚いた。

「えッ！？お前水泡さんと映画かよ！」

「つたり前だろ！此処まで来て映画観ないで帰る方がおかしいだろ。わざわざ来る意味なんかねえじゃん！」

「ごめん理紗。あいつらしつけーからさ、どうしても理紗と一緒に映画観たいって言うんだけど・・・。」

僕は根負けして、友達のを要求を理紗に話した。

理紗は、凄く悲しそうな顔をした。

横川 亮

理紗は少し考えてから言った。

「いいけど……。」

けど、何だろう。理紗は続きを言いたそうにしていたが、悲しそうに後ろを向いた。これは、理紗が困ったときによくする癖のようなものだった。（早く行って。）という意味なのだろうと思う。

「わかった、有難う。アイツらに言ってくるから待ってるよ。」

何で僕がアイツらの為に有難うと言わなければならぬのだろう。それに、気分が晴れない。折角のデートだと言うのに、台無しだ。

僕が友達に言いに行くと、その友達の一部、横川 亮という奴が真っ先に言った。

「じゃあ俺、水泡さんの隣〜！」

なっ……なんだと!?そこは僕の席だろ!

「亮ずりい〜!俺も隣が良い!」

「俺も俺も!」

「ふざけんな、俺も!」

皆好き勝手過ぎる。僕がため息をつこうとしたときだ。

「あたしの隣の席は、勇樹に決まってるのっ!」

理紗が、はっきりとそう言ったのだ。僕は言葉の意味を理解した時、嬉しくて涙が出そうだった。

横川も、その他の友達もこれにはただ頷くしかなかった。最終的に

選ぶ権利のある理紗が、僕を指名したのだから。

映画は、泣けるラブストーリーだった。理紗は水色のハンカチで何度も涙を拭っていた。理紗の涙は誰よりも透き通っていて綺麗だと思う。重症なのは重々承知だ。

「泣けたね、勇樹。ミホちゃんが、あんなところで死んじゃうなんて……」

映画が終わった後も、感想は僕にしか言わなかった。笑いかけるのも僕にしかしなかったし、横川達には話しかけもしなかった。

僕は一人で、（これは脈あるんじゃないか？）と思ってほくそ笑んでいた。

だけど僕は、横川が凄い勢いで睨みつけて来るのをまだ知らなかった。

第4話 告白

横川達と別れて、僕と理紗は家に帰った。理紗の家に今僕の母さんが居るので、僕は迷いなく理紗の家に入った。

「なあ理紗ー、大丈夫だったか？」

僕は理紗に聞いた。

「何が？・・・ああ、横川君の事？」

「そう。なんか理紗、嫌そうだったから・・・。」

僕は理紗が本当にそういう態度だったから聞いただけなのに、理紗は僕にこう言った。

「・・・勇樹は、あたしが横川君と仲良くしてほしいの？」

「え？」

「勇樹は、あたしより横川君の方が大切？」

「・・・なんとという事だろう。理紗は僕の事を誤解している。それだけじゃない。僕の思い違いかもしれないけど、理紗は遠まわしに”あたしの事が好きじゃないの？”と聞いているのだ。」

少し間を置いて、僕は答えた。

「・・・理紗の方が大事に決まってるんだろ。」

その後に猛烈に恥ずかしくなって、僕は小さな声で幼馴染みなんだから、と付け加えた。

理紗はそれを聞くと、また悲しそうな顔をした。

「幼馴染みとして・・・なの？」

僕の心臓の音が、凄く早さで打ち始めた。理紗・・・？

「そう、じゃあいいもん。あたし、横川君と付き合う！」

えっ！！？僕は、本当に驚いた。な、なんで話をそこに持っていく

んだよ!?

「どういう事だよ理紗!」

「あたしは唯の勇樹の幼馴染みだから。でも勇樹にはあたしが誰と付き合おうと関係無いでしょ。」

僕には。理紗の彼氏が誰だろうと、関係ない……。

その言葉を聞いた途端、僕は愕然としてしまった。そして、決心した。

今、ここで理紗に告白しよう……。

僕は言った。もう少しで、声が震えてしまいそうだ。

「理紗。」

「なに?」

「俺、もう知ってるかもしれないけど……理紗が好きだ。」

第4話 告白（後書き）

ここまで読んで下さり、有難うございました（*^|^*）

次話も宜しくお願いします（^o^）

第5話 人魚姫

僕は、理紗は知っているのだとばかり思っていた。てっきり、知った上で僕に気があるようなふりをしているんだと思ってた。

「…………え？」

これは、僕にとっても理紗にとっても予想外だったに違いない。

「…………本気で言ってるの、勇樹。」

理紗は言った。僕は何も言わずに頷いた。

その時理紗が、幼馴染みの僕でさえ見たことのない、凄く切ないよ
うな、苦しいような表情をした。やっぱり僕じゃ駄目だったのかな
…………。そう思いかけた時だ。

「…………分かった、もう少し待って。あたしに考えさせて。」
僕は、勿論頷いた。

「大丈夫、きっと、理紗との友情関係は壊れない。」
僕は、ふられた時の事を考えて落ち込んでいた。だけどそんな考え
を吹き飛ばしてポジティブにする為に、暗示をかけるようにして僕
はそうボソボソと言っていた。

・・・昨日、夜寝る前に、通信簿が悲惨だったことを思い出して、頭が痛くなった。全然理紗とは関係ない話だけれど、こうしてないとまた暗示をかけなくちゃならない羽目になるから、今は理紗の話はやめておこう。さて、これから全く違う事を考えなくちゃ。

「勇樹ってば、何であんなところで告白するんだろう。」

あたしが動揺してたからかな。それとも、告白する決心を最初からしてたのかな？

・・・まあ、どっちにしてもあたしにとっては一大事だし。どうしよう。ママに言ったら確実に断りなさいって言うに決まってるし・・・。人魚って、なんでこんな面倒な生き物なんだろう。あたし、普通に人間として生まれてきたかったな。なんで、人魚がこの世界に移住してきたんだろう。日本では、あたし達しか人魚は居ないしなあ。ママに聞いてみよっ。

「ママ、何であたし達は人間世界に来たの？」

「何よいきなり。まさか、何か企んでるんじゃないでしょうね。」

「そんなことないよ。早く教えて。」

「理紗、あなたのパパが海の海底王って事は知ってるでしょ？パパが、人間の調査に行つて来いって私たちを送り出したの。それだよ。」

「じゃあ、何が分かったら帰るつもりなの？」

「帰るつもりなんて無いわよ。・・・あ、でも、緊急で帰ることはあるわね。」

「どんな時が緊急なの？」

「あなたが・・・人間と恋に落ちた時。」

第6話 立場

昨日からずっと、僕の目はうつろだった(らしい)。母さんに何度もどろしたの、と聞かれて不審がられたのだ。恋をするとご飯が喉を通らなくなるってよく言うけれど、まさに僕はそんな状態だった。今日の朝だって、

「うちそうさま」

と、二口食べただけで終わった。・・・、女の子みたいだ。原因はもう分かり切っている。母さんや弟にまで心配されて何度もどろしてなのか聞かれたけれど、さあ、としか答えなかった。父さんは、すっかり思春期のせいだと思ひ込んでいるみたいだ。僕は気分を改善させるべく、外に出ようとして鏡を覗き込んだ。

「うわっ！」

自分でも驚くほど、馬鹿のような顔をしていた。不細工の類ではない。やつれと疲労と気だるさの生んだ代物だ。理紗に告白したことの不安で、こんなにも顔が死んだようになってしまったとは夢にも思わなかった。とにかく僕は、顔を洗って髪をとかして歯を磨いて服を着替えて、何とかまともな格好になると、ようやく外へ出た。

どこへ行くにも当てがないから、公園にでも行って、時間を潰そうと思った。

「はああ・・・。」

陰気な雰囲気が多分、今僕に一番ふさわしいだろう。

・・・そんなことを考えていると、ブランコで遊んでいる幼稚園くらの男の子達を見つけた。可愛いな、僕も理紗もこんな次期があったんだよなあ、と違ってふと横を見ると、理紗が鉄棒の上に座っ

て、足をブラブラさせながら退屈そうにしているのが見えた。バツドタイミング、とはこのことを言うのだろう。僕は急いでその場から立ち去ろうとした。でも、立った直後に理紗に見つかった。

「あ、勇樹！」

理紗は、なんだか浮かぬ顔をしていた。やっぱり、駄目なんだろうか。

「あのね。」

理紗の一言一言に過剰に反応してしまう自分が情けなかった。

「何？」

理紗の一言に、僕も一言で返した。必要以上に話を広げるつもりはない。

「もしあたしが、勇樹に恋しちゃいけない立場だったら、どうする

？」

「・・・え？」

これには拍子抜けした。何を言い出すかと思えば、例え話か。

第7話 信頼

僕は、理紗の例え話に乗ることにした。

「そりゃあ、何とかして立場を改善させるんじゃないか？」

僕は少し考えてからそう言った。それしか、理紗の浮かない顔に対する言葉が見つからなかったんだ。蝉が鳴きはじめた。もう夏なのだ、僕は頭の奥で考えた。

「・・・ほんとに？」

理紗は、僕に確かめるようにして言った。その言い方は、何かを恐れているみたいない方だった。

「ほんとだよ。」

僕は答えた。入道雲が、太陽を少しだけ隠した。蝉はまだ鳴き続けている。

「じゃあ、勇樹はあたしの事、信じれる？」

唐突におかしなことを聞かれた。理紗は、何がしたいんだろうと思っただ。

「信じれるよ。今も、信じてるし。」

理紗の真っ直ぐな視線から、本気で聞いていることだと分かった。

理紗は、その美しいさらさらの髪の毛を揺らして、僕に言った。

「- あたし、人魚なの。」

え？普通の人なら、そこでこう言っただろう。だけど今の僕は何故か、大して驚きもしなかった。

「ふーん。」

僕はそう言ったまま、理紗の事を見つめていた。

「・・・疑わないの？」

理紗の方が驚いたらしく、僕にそう問いかけてきた。

「理紗がそう言うんだったら、そうなんだろ。」

僕が答えると、理紗は途端に笑顔になった。

「ほんとに？勇樹、人魚って言っても信じてくれるの？」

「お前がさつき聞いたんだろ。理紗の事を信じれるのかって。」
理紗は細くて白い腕を僕の背に回した。抱きついたんだ。そこで僕は初めて赤面して、理紗を引きはがそうとした。内心、最高に嬉しかった。

「おい、何してんだよっ！」

僕はそう言っつて理紗を離れた。理紗の方が嬉しいらしく、何度も僕に笑いかけて、有難うと言った。

「詳しく話してあげる。こっち来て。」

僕は理紗に言われるがままになって、公園を出た。

第8話 真実

理紗は言った。

「あたしはね、今まで人魚って事を隠してきたでしょ。それってなんでだかわかる？」

「世間に知れたら大騒ぎになるからじゃないか？」

僕がそう答えると、理紗は少し考えて言った。理紗の何か考えるときは仕草も、凄く可愛くて、こっちが改めて驚いた。

「それもあるんだろうけど、人魚は人に恋されたり恋したりしちゃいけないからなの。」

神話のようで、僕は興味が湧いてきた。

「何で人魚が恋しちゃいけないんだよ？っていうか、じゃあ俺はどうなるんだよ。」

理紗はそこで、少し深刻そうな顔をした。僕が聞いちゃいけないことを聞いたのかなと反省しかけていると、理紗は僕の間を見て言った。

何か決心したみたいなお表情だった。

「人魚が人と恋に落ちると、海底王っていうあたしたちのお父さん的な存在の人に、声を奪われちゃうの。」

声を奪われるって、なんだか人魚姫みたいな話だと思っていると、理紗は続けて話だした。

「人魚姫のお話、知ってるでしょ？人間界で恋をした人魚が、魔女のお婆さんに頼んで声を無くす代わりに、人間にしてもらったけど最後は泡になっちゃうって話。」

「うん。」

「あれはね、実話なんだよ。ずっとずっと昔にあった話なんだけど、その時海底王は凄く悲しんで、人間と恋した人魚は声を奪ってしまっうっていう恐ろしい罰を与えたって訳。」

僕は、人魚姫が実話だなんて思ってもいなかった。だから結構、いやかなり驚いた。しかもその風習が今でも罰として残っているなんて、ちよつと地味に感動してしまった。

第9話 答え

理紗は僕にそれから色々と言明をしてくれた。つまり、人間との恋は本当に理紗にとつても僕にとつても危険だという事だ。

「だから・・・勇樹にお願いがあるの。」

僕にお願いなんて、意味があることなのだろうか。僕は理紗の話を聞いていて、人間より遙かに人魚たちの方が凄い事を知ったから、少し心配になった。

「いいけど・・・俺にできることなのか？」

「勿論。勇樹だから頼めるんだよ。」

理紗は真剣だった。・・・いつになく。

「あたしは、勇樹が好き。これが告白の答えなんだけど、今説明したみたいにあたしのパパがそれを許さないの。」

僕は理紗の答えに安心した。これで断られたら格好がつかないし、確実に最悪な気分になっていたらどうから。

「だから、あたしと一緒にパパのところに行ってくれない？」

つまりは「・・・、ちやちなドラマのなかに出て来る恋人が、娘の両親に挨拶に行くみたいなのやつか。僕がその役をするなんて考えてもみなかった。」

「うん、分かった。いいよ。」

僕はあっさりと返事をした。理紗はこの即答に驚いた顔をしていたけれど、すぐに笑顔になった。

「ありがとう！じゃあ、明日の午後一時にここに来てね。話したいことがいっぱいあるから。」

理紗はそう言った。僕は笑顔で頷いた。もう、公園の時計は午後二時を回っていた。

だけど、まだ僕たちは気づいていなかった。その会話を、全て聞いている人間が居ることを……。

第10話 訪問

次の日。僕は理紗との待ち合わせに遅れないように、早くから準備をしていた。すると、家のインターホンが鳴った。両親は会社に出勤していて留守だったので、僕は玄関に出た。

「はい、どちら様ですかー・・・」

僕がドアを開けると、そこには横川亮が立っていた。

「よ、勇樹。」

横川はにっこりと笑った。僕は少し驚いたけど、横川を部屋に入れてやった。

「どうしたんだよこんな早くから。」

「いやさー、俺ちよつと本気で勇樹に相談したいことがあるんだけど。」

横川がこんな風に僕に相談を持ちかけて来るなんて珍しい。

「なんだよ、改まって?」

「実は・・・」

横川が止まった。

次の瞬間、僕は横川の大きな体格にはがいじめにされ、ハンカチで口と鼻を押さえられていた。僕はもの凄く驚いて、思いきり動き回った。

「っほおはわっ!?!?」

「悪いな、勇樹。お前に理紗は渡せねえんだよ。」

僕は、どんどん^{まぶた}瞼が重くなっていった。体から力が抜けて行った。

横川が抵抗できなくなった僕を、床にドサリと放した。

「即効性のある麻酔薬っていいなあ……。これ結構高かったんだよな。これであと4時間は眠り続けるはずだ。」

僕は横川の足元を見ながら、その言葉を聞いていた。

「これで理紗は俺のもんだ。じゃあな、勇樹。ゆっくり寝ろよ。」
薄れゆく意識の中、僕は凄い危機感を感じた。

「理紗、ごめん……。約束の時間に、間に合いそうもねえや……。」

僕は、自分の部屋のフロアリングの上で、念入りに選んだ服を着て、深い眠りに落ちて行った。

第11話 策略

「勇樹、遅いなあ・・・。」

あたしは、約束の時間になっても現れない勇樹をずっと待っていた。もう、優に30分は経過している。今日は一番可愛い洋服を選んで着てきたし、髪の毛のセットもばっちりしてきたし、爪もつやつやに磨いてピンクのネイルにした。それなのに来ない。勇樹が、来ない。ずっとずっと待ち焦がれてきたあの男の子が、あたしの目の前に現れて、優しく微笑んでいない。

何故こんなにオシャレをしてきたかと言うと、あたしのママに会わせるためだ。ママは、海底に行けるだけの能力みたいなものを持っていて、あたしだけじゃパパに会いに行けないからだ。

「それにしても遅い。あたしは、勇樹の家に行ってみようと思った。すると、向こう側から男の子の人影が見えた。きつと勇樹だ！あたしはその人影に向かって走って行った。しかしそこに居たのは、横川亮だった。」

「水泡さん、よかったあ、まだいた！」

横川君はそう言って、手を自分の胸元にあてた。あたしはこの人は、オーバリアクションすぎるし、あんまり好かない目（睨むような）をするので、苦手だった。

「どうかしたの？あたしに何か用？」

あたしは目をそらしながら言った。横川君はにっこりと笑った。

「俺、勇樹から伝言を預かって来てて、水泡さんに伝えてほしいって言われたんだ。」

それを聞いて、あたしは天に舞い上がるくらい嬉しくなった。なんだ、勇樹は忘れてたわけじゃないんだ。あたしが勘違いしてただけなんだ。

「勇樹、何て言ってた？」

あたしは横川君を急かすように言った。横川君は、笑顔を崩さずに答えてくれた。

「今日、ちょうど凄い大事な用事が入ったから、明日にしてもらえないかって。」

あたしはホツとした。大丈夫だ。計画が明日に延びただけ。すると、横川君が一層につこりして言った。

「俺、ちょっとこれから暇なんだ。遊びに行かない？」

第12話 誘惑

「え……」

あたしはたじろいだ。横川くんはスポーツマンっぽい、可愛いとも思える笑みをあたしに向けて言った。

「勇樹はどうせ今日は来ないし、水泡さんも用事はないんでしょ？俺が全部おごるからさ、ゲーセンとか行こうよ。」

あたしは、まあ、それもいいかなと思った。いろんな人と付き合うのは悪いことじゃないし、横川君と親しくしておいたら、勇樹のことかも、もしかしたら聞き出せるかもしれないし。

「……うん、いいよ。じゃあ、どこのゲーセンに行く？」

あたしは横川君に微笑んだ。横川くんも、あたしに向かってにかつと笑った。

「あのさ、友達も呼んでいい？」

あたしは携帯を取り出しながら聞いた。横川君は笑って言った。

「それじゃ、俺のお金が無くなっちゃうよ。」

「……あ、おごってくれるんだった。」

「あ。あははは、ごめんね、そうだったね、おごってくれるんだったよ。」

今日初めてこんな風に笑った。勇樹とだったら、多分終始笑顔だと思っただけだ。

「水泡さん、理紗って呼んでいい？」

唐突に横川くんが聞いてきた。別に悪くはないけれど、あたしは勇樹以外の男の子に下の名前で呼ばれるのはちょっといやだった。でも、これも勇樹のためでもあるし、あたしは笑顔でOKした。

「うん、いいよ。」

「俺の事も、亮って呼んでよ。ね？理紗。」

少し、むず痒い気持ちだった。あたしは、心のもやもやの取れない自分が嫌になった。なんて醜いココロなんだろう。これで、よく人魚だなんて言えてるなあ、と思った。

それにしても。勇樹の急用って、なんなんだろう？あたしは亮に聞いた。

「ねえ、勇樹の急用ってなんなの？」

すると亮は、途端に表情をこわばらせた。言葉にも詰まっている。

「う、うーんと、確か・・・遠いところちの人が、どうとかって・・・。」

明らかに挙動不審だ。あたしにだって、それくらいの事は分かった。この人は、亮は、何かを隠しているんじゃないのかな？

「ねえ、亮？あたしに何か隠してるんじゃないの？勇樹は、本当に何があったの？」

あたしは、食らいつくくように亮に聞いた。

第13話 不安

亮は、あたしの事を直視できないみたいだった。あたしは、まだ亮の言葉を待っている。勇樹に何かあったんじゃないかと凄く心配になって、あたしは不安がこみ上げて来るのを我慢した。

「勇樹は・・・」

やっと亮が話出してくれた。あたしは、亮の目を見て聞き入る。

「勇樹には、用事があるんだ。俺は、その伝言を伝えに来ただけなんだ。理紗が心配するだろうからって、勇樹に頼まれただけ・・・」

「

どうして、本当の事を話してくれないんだろう。あたしは、ただ本当の事が聞きたいだけなのに。亮の事を怒ってもいけないのに。怒る気もないのに。もしかして亮には、あたしに話せない理由でもあるんじゃないかな・・・。あたしに目を合わせてくれない亮に、あたしはおかしな期待をしまっていた。勇樹に何事もないと、断言してほしい、と。

「亮、あたしに話せない理由でもあるの？もしかして、勇樹に何かあったの？」

あたしは、不安で不安で胸がいつぱいになるのを必至で押さえながら、亮に聞いた。

*

話せないどころの理由じゃねえよ……。俺の心のなかは罪悪感と不安でいっぱいだった。このことがばれたら確実に、俺は理紗に嫌われる。多分、今俺とつるんでる仲間も、俺の事を軽蔑して、離れて行ってしまっただろう。

そうなってしまうたら、今まで苦勞して作り上げてきた「横川 亮」という存在は、必ず俺自身を苦しめることになる。でも今は、目の前に居る俺の大好きな少女に、真実を説明しなくてはいけない。蝉の、羽を震わす耳障りな音が、俺の心臓の鼓動を早める。

「俺、俺は……。勇樹の事を……。」

冷や汗が背筋を流れた。理紗は俺の目を見つめ、黙って聞いている。俺は決意して、理紗に真相を話そうと、つばをゴクリと飲み込んだ。途端に口の中が乾く。

「俺は、勇樹の事を騙して、麻酔薬を嗅がせて、今、部屋で気絶させてるんだ……。」

理紗の目が、一段と開かれたのは、言うまでもないだろう。

第14話 有難う

「そ……それ、本当……？」

あたしは茫然と聞き返した。今勇樹がここにいないのは、亮のせいだつてこと……？亮は、ゆっくりと頷いた。あたしは、勇樹にこのことを伝えるために、走り出そうとした。その、まさに亮の前を横切ろうとした瞬間、あたしの腕がぎゅっと握られた。振り返ると、亮が、泣いていた。

「訳わかんねえのは、わかる。……キモいと思われてもしょうがないと思う。でも……俺、俺……。勇樹に危害を加えるっていう馬鹿なことをするくらい、理沙のことが好きなんだ。」

あたしは、ハツとした。「好キナンド」。あたしも、あたしのことを強く想ってくれてる亮と同じくらい、勇樹のことが好きなんだ。亮は、あたしを独り占めしたいという独占欲に、理性が打ち勝てなかっただけなんだ。それくらいあたしを好きって想ってくれるのは、凄く嬉しいと思う。

でも……でも！

「……ごめんなさい、亮。あたしは、亮があたしのことを好いてくれているとおんなじように、勇樹のことが好きなの。馬鹿みたいに好きなんだ。だから、亮のしたことの気持ちには、ほんとによくわかるよ。あたしだって、勇樹を束縛したいと思ったことだっていっぱいあるし、好きな人のためならなんだってできる自信がある。でもね、あたしが嘘の、ハリボテの表面だけの笑顔で亮と付き合うこ

とになっても、なんの得にもならないし、気分も晴れないと思う。
・・だから、本当にごめんさい。あたしを好きって言うてくれて、
ありがとう。」

これが、あたしの今の精一杯の表現だった。勇樹が好きだということとはちゃんと伝えたいし、ありがとう、とも言えた。もう、あたしは、亮に何を言われても動じない。

その時、亮がニツと笑った。いつもの、みんなに見せるような、爽やかな微笑みだった。

「・・・正直に言うてくれなかったら、どうしようかと思った。でも、理沙が俺の思った通りの人でよかったよ。勝手にこんなことして、ごめん。勇樹にも、会わず顔が無いよ。・・・はい、コレ。」

そう言うて亮が渡してくれたのは、小さな錠剤だった。

「これは？」

「麻酔薬の効果を急速に促進させて、効果を弱める薬。簡単に言うと、勇樹が起きる薬。」

あたしの顔に、笑みが広がった。

「有難う！」

あたしは、にっこり笑って、太陽の熱に焼けて、塵気楼が見えそうなくらいじりじりしたコンクリートに書かれた横断歩道を渡って、

勇樹の家へ急いだ。

第15話 涙

目をあけると、一番に理沙が視界に飛び込んできた。一瞬、何が起こったのか理解できなかったけど、理沙の安堵の顔を見て、すべてを思いだした。

「……理沙！おっ、お前、大丈夫だったのか！？ってゆうか俺、なんで……」

理沙がその言葉を遮った。

「大丈夫、今から全部を説明するね。」

理沙から聞いたのは、僕が寝ていた間に、横川と理沙が大変なことになっていたということの一部始終だ。それを聞きながら、僕は内心ほっとした。

「……まあ、とにかく理沙が無事でよかったよ。俺が不甲斐なくてこんなことになったんだけどな。」

僕が微笑むと、理沙の顔が真っ赤になった。そして、綺麗な瞳から透明な液体がこぼれた。

「えっ！？」

僕と理沙の驚きの声が同時に上がった。

「り、理沙、どうかしたか？なんで泣いてんの？」

「あ・・・あたし、なんで泣いてんだろ・・・。」

自分でもわかっていないようだったので、少し吹き出してしまった。

「も、もう。笑わないでよ。」

理沙が涙を一生懸命拭いているのに、涙は一向に止まらない。それどころか、どんどん溢れてくるばかりだ。僕が理沙にハンカチを渡すと、理沙は涙に濡れた手を僕の手と重ねた。ドキンと鼓動が激しく鳴り、顔が赤くなるのが僕にも実感できた。

「・・・明日は、一緒にママのところに行つてね？」

うるんだ瞳で上目づかいで言われると、（女の子みみたいな表現だけ）どうしようもなく胸が高鳴ってしまう。

「う、うん・・・。」

赤い顔を隠そうとするのに、僕は必死だった。手が熱くなるのは、もう抑えることができなかった。目を逸らしたり、ハンカチを強く握ったり、その手をゆっくり下ろしていた僕に、理沙が可愛らしく、けれど意地悪っぽくクスツと笑って言った。

「これで、おあいこだね？」

僕は、再び赤くなってしまった。

第16話 約束（前書き）

随分と更新が遅れてしまいました（；ーー）

遅くなりましたが、ご愛読をよろしく願います（＃＾・＾＃）
それでは、本編をどうぞ！

第16話 約束

僕は、次の日の約束はきちんと守ることができた。理沙に、これ以上辛かったりする思いをさせたくないもなかったのもあるし、僕自身が約束を果たしたかったのもある。けれど一番の理由は、理沙の母親に僕と理沙のことを認めてもらいたかった、ということだ。僕は理沙にこう言った。

「理沙のお母さんに会っても俺たちのことを認めてもらえなかったらどうなるんだ？」

理沙は少し考えてから言った。

「まずはあたし達のことを明かさなくて、あたしのパパのところに行ける道を作ってもらうことにする。勇樹がママに、関係のことを話して、なにか魔法をかけられたりしたら大変だし。」

僕はふーんと頷いた。理沙は続けた。

「あたしのママとパパはね、魔法使いなんだよ。時々、変な薬調合したりして、あたしで試そうとするから、阻止するのが大変なの。」

そういって、理沙は僕を笑わせた。そうしているうちに、理沙の家についた。理沙は深呼吸をして家のドアを開けた。

「ただいまー。」

「理沙？おかえりー。」

「勇樹つれてきたよ。」

「勇樹くん？いらっしやーい。」

「あ、こ、こんちはー。」

その40秒くらいのやり取りの間で、理沙の母親の紗和子さわこさんの声のトーンが低くなった。特に、僕のことを理沙が紹介したところから。僕は、いつになく緊張して理沙の家のなかに入った。

「おじゃまします。」

理沙は、明るい水泡家の中を、どんどん進んでいった。もうここまでくれば、腹をくくるしかない。

「ねえママ。」

理沙が、ついに言った。僕はリビングに入るか入らないかくらいのところに立っている。

「なに？」

テレビを見ながら、紗和子さんは理沙に応答した。理沙は唾をゴクリと飲みこんで話し始める。

「勇樹に、あたしの本当のことを知ってもらいたいの。だから、パパのところに行かせて。」

紗和子さんは、テレビから片時も目を離さずに、ゆっくりと言った。

「どうして？」

僕は、心底緊張した。こんなに静かに喋る紗和子さんを、見たことがなかったからだ。まだ紗和子さんはテレビから目を離さない。

「勇樹は、幼馴染だし、こ、これからも大事な友達として付き合っていくと思うから、いつまでも隠し事はしたくないの。」

僕は、紗和子さんを見つめた。

「ふうん……。それって、私たちのメリットになると思っ？」
その厳しい問いに、理沙は即座に答えた。

「も、もちろん。」

「・・・そう。じゃあ、約束は守れるのね？」

「守れるよ。それだけは絶対。」

「わかった。いいよ。・・・勇樹君？」

いきなり呼ばれて、僕の心臓が跳ね上がった。

「は、はい。」

紗和子さんは、にっこり笑った。いつもの、優しそうな笑みだった。
「こっちに来て。・・・準備はいいのね？」

紗和子さんの目に、真剣な光が灯った。

第17話 海空領域（前書き）

理紗の「紗」の字がずっと「沙」になっていたことに最近気づきました（；ーー）

すみません、今回から訂正しましたので（汗）。

では、本編のほうをどうぞー！（^^）！

第17話 海空領域

それは、一瞬だった。僕が認識できないくらいの一瞬だった。紗和子さんの目を見た瞬間のことだ。僕も理紗も、びっくりして息がつまりそうになった。

「……………」

しばらくの間、僕たちは言葉を発するという思考回路が働かなかった。理紗は僕のことを見つめて、こう言った。

「パパのところに行かなきゃ……………」

僕は茫然としながら、とりあえず理紗の手を取った。そして、ぼそりと小さな声で

「行こう。」

と言った。僕は理紗の細い指に僕の指を自然に絡ませて、歩きだした。ーここは、どこなんだろう。海の中だとしても息はできているしかも、なんだか想像したよりずっと幻想的なところだ。上を見ると、真ん中から徐々に青がグラデーシヨンのように濃くなっている。周りは夜のように静かで、けれど夜ではなさそうだ。僕は、理紗にここはどこなのだと思おうと思って口を開いた。

「……………」

理紗も同じことを考えていたらしく、すぐに答えてくれた。

「ここはね、海底王の住んでいる海空領域？っていうところなの。あたしもよくわかんないけど、パパは人間の世界に住んでるあたしたちみたいな人魚のために空気をとどめてるんだって。」

僕は感心した。海底王にはそんな力まであるのか。僕はそれと同時にドキリとした。もしも理紗がこんなに力のある海底王に本当に声を奪われてしまったらどうしよう。僕は理紗の容姿も性格も好きだけれど、声も好きなんだ。この透き通るように美しく波打つ声。僕は理紗の声に聞き入ろうと決めた。

「理紗、海底王ってどこに住んでるんだ？」

理紗は少し考えてから答えた。僕はそれに聞き入った。

「もうすぐ見えると思うよ。パパの住んでるところは、すごい綺麗な楽園みたいなところなんだってママが言ってたんだ。」

僕は緊張してきた。紗和子さんのところ以上に心臓が早く鳴る。

「あつ、アレだよ勇樹！」

理紗が言った言葉に、僕の心臓は極度に反応した。

第18話 父親

僕は、ゴクリと唾を飲み込んだ。そして、理紗の指さす方向を見た。

「……………これが、宮殿……………」

僕は、理紗のほうを見て、もう一度宮殿を見つめた。竜宮城に来た浦島太郎もこんな気分だったんだろうか。でも、僕のほうが驚きは大分大きいだろう。ここは竜宮なんかよりも、ずっとずっと豪華だった。

「ここに、理紗の父親が……………」

僕はゆっくり深呼吸して、理紗の手をしっかりと握った。そしてまた歩きだした。白くそびえ立った大きな柱を通り過ぎて、明るい宮殿内を、理紗と一緒に歩いた。すると、大きな王様の部屋の扉みたいなドアに突き当たった。

「ここは、どんな部屋なんだ？理紗の父さんの部屋なのか？」

僕が言うと、理紗は軽く頷いた。

「そう……………パパが、居るの。」

海空領域を作る力まである海底王なのだから、どんなふうに僕を歓迎して下さるかわからない。でも僕はもう怯まなかった。理紗のために、どんなことでもしてやるといふ気持ちだった。

「行こう。」

僕は言い、ドアを開けた。そこは、物凄く豪華で華々しいところだった。が、人の姿はなかった。海底王の使っていると思われる家具は全て普通の人間のサイズだったし、巨人でも小人でもないということがわかったので、僕は不思議に思いながら辺りを見回した。

「!?!」

突然理紗が驚愕の声をあげた。

「どうした!?!」

僕が言っても理紗は僕の声に返事をせず、真つ直ぐに一番豪華なベッドに駆け寄っていった。僕も驚いてベッドに駆け寄った。するとそこには、驚くほど老衰したおじいさんが横たわっていた。

「この人は?」

僕が聞いても、理紗は答えずただただ首を小刻みに横に振りながらベッドの傍に座り込んでいる。理紗が落ち着くのを待って、僕はもう一度理紗に質問した。

「理紗、この人は?」

理紗はか細い、今にも崩れてしまいそうな声で僕の問いかけに答えた。

「あたしの・・・パパ。」

第19話 誤解

僕も、理紗の答えに驚愕した。この人が、僕の恐れていた、海底王・
・・・？そんな、まさか。僕の予想は、伝説の王ポセイドンのように
大きくて威厳があつて、炎のように僕を睨みつける巨大な人物像だ
つた。

「パパ・・・！！」

理紗は目に涙をいっばいたためて、海底王の老衰しきつた体に手を置
いた。シルクのように柔らかな素材のベッドシートに、理紗の涙が
落ちた。

「・・・リ、リサーナか・・・？」

海底王がその言葉を発した。どういうことだろう。理紗は海では、
リサーナと呼ばれていたのだろうか。

「そう、パパ、わかる？帰ってきたの。大ニュースがあつたけど、
パパの事情のほうが先だね。」

理紗はそう言って、海底王を抱きしめた。

数分後、海底王の使用人が来て、僕たちを見つけて驚いた顔をした。
目を丸くして、理紗と僕を交互に見つめている。

「も、もしかして、リサーナ女王様でございますか？なんてことで
しょう！リサーナ様が人間の男を連れてお戻りになられたわ！」

使用人はそう言って、両手で頬を覆った。僕が困って、大騒ぎをしている使用人をなだめようと手を伸ばすと、使用人は僕の手をバシツと払いのけた。

「触らないで！汚らわしいっ！！」

僕はびつくりして手をひっこめた。ここでは人間は、人間の男は、こんなにも毛嫌いされているのか！？大体汚らわしいってなんだよ！自分がそんなに崇高で清らかな存在だとも思っているのか！？理沙は、なんの躊躇いもなく僕に触れているというのに！僕が怒りを爆発させようとすると、理沙が駆け寄ってきて、小声で言った。

「純血の人魚は、人間のことを毛嫌いするの。私は、もうほぼ完全に人間と同化しているからそういう考えは無いんだけど、この人魚は、足も人魚のままだし、完全な純血人魚なの。パパが傍に置くのも理解できる。パパの考え方は、体は老衰していても、残ってるよ。」

理沙はそう言って、目を伏せた。僕が理沙にしてあげられることは、今の時点では何もないけれど、いつかきつとできるはずだ。周りの人魚の理解を得ることも・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1567h/>

きらきら

2010年12月4日04時33分発行